

教員の感性を豊かにし授業が変わるドラマ体験の質的研究

竹田里香（姫路獨協大学）

「学び方」改革が進む中、柳瀬は知性、理性だけではなく、感性を意識した教育も視野に入れるべきと主張している（柳瀬、2016）。感性は、本を読んだり授業に出て講義を聞いたりするだけではなく、実際に何かを体験することを通してはじめて伸ばすことのできる感覚的能力であると言える。その方法には、異文化理解教育で外国の人との交流や、芸術的な活動（美術館や博物館を訪れたり、舞台を鑑賞したり）や、協同学習であるインプロやドラマを通じた活動があるが、その中でもドラマは、身体的・情動的にもどちらにも大きく作用すると考えられる。

しかし、例外的学校を除き日本では、ドラマという科目がなく、訓練されたドラマ教師もほとんどいないため、教師自身が指導に対するイメージが持てないと渡部（2014）は指摘する。劇指導ができるようになる事も目的ではあるが、著者自身がドラマを通し、教員として大きく変化し、授業の質も変わってきたと実感していることもあり、初めてドラマ作りに参加をした中高2人の教員に対して質的研究を行った。

民間団体である「マーブルズ英語芸術学校（代表：小口真澄氏）、東京」主催の『指導者向け英語 DE ドラマ』という1日から3日間で1つのミュージカル作品をその時に集まった仲間で作成し、最後に発表を行うというワークショップを受講した中高英語科教員に、ドラマ体験を通しての気づきや自身の変化、教員がドラマ体験をすることの教育的波及効果について半構造化インタビューをし、質的分析の一手法である SCAT 分析（大谷、2011）を行った。

結果、自らを客観的に捉える訓練になり、自己解放・自己開示傾向がみられ、仲間との強いラポール・信頼感・達成感を感じ、その経験がよりその教員の感性を豊かにし、常に変化し成長を続ける教師を生み出し日々の授業を変えるという事が分かった。本研究では、SCAT 分析結果だけでなく、追跡調査として、具体的に授業が変わったところを実験参加者に振り返ってもらい、ワークショップとの関連性を考察する。

参考文献

- 大谷 尚(2011)“SCAT:Steps for Coding and Theorization ー明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法ー”, 感性工学, Vol. 10 No.3 pp.155-160
- 竹田 里香・安達理恵（2018）『教員の感性を豊かにし授業が変わるドラマ体験の質的研究』全国英語教育学会第45回弘前研究大会予稿集
- 柳瀬 陽介(2016)『英語教育の基盤としての感性についての理論的整理』第47回中国地区教育学会資料
- 渡部 淳・獲得型授業研究会(2014). 『教育におけるドラマ技法の探求ー学びの体系化に向けて』東京：明石出版